

【実践研究】

小学校体育におけるクラスルームソーシャルスキルトレーニング(CSST)が学級状態に及ぼす影響

藤村 一夫* 河村 茂雄**

本研究では、小学校体育の授業にクラスルームソーシャルスキルトレーニング(Classroom Social Skills Training:CSST)を取り入れ、学級状態への影響と効果について考察することを目的とした。調査はA県の公立B小学校第6学年の児童を対象とした。その結果、配慮のスキル、かかわりのスキルがいずれも向上するとともに、良好な学級状態に変容した。これにより体育の授業におけるCSSTが学級経営により影響を与える可能性があることが示唆された。

キーワード：クラスルームソーシャルスキルトレーニング(CSST)、体育授業、学級状態

【問題と目的】

児童生徒の学校適応を目的として、ソーシャルスキルに関する研究やソーシャルスキルトレーニングを取り入れた教育実践が注目されている。

武蔵・河村・藤村・荻間澤(2012)は、児童が学級生活で活用しているソーシャルスキルと心理的ストレスとの関連について、調査研究を行い、配慮のスキルとかかわりのスキルが身体的反応、抑うつ・不安感情、不機嫌・怒り感情、無気力や学校忌避感情に影響を及ぼしていることを明らかにし、児童が学級生活を意欲的に過ごすためには、配慮のスキル、かかわりのスキルともによく活用させる重要性を指摘した。

また、武蔵・河村(2015)は、学級集団の状態像と児童の学級生活意欲及びソーシャルスキルとの関連を調査し、学級状態を6つに類型し、最も学級状態がよいとされる親和的な学級状態においては、学校生活意欲とソーシャルスキルの遂行状況が良好であることが指摘された。

ソーシャルスキルを学級経営に取り入れる効果として担任教師に対する信頼感が促進され、学級生活満足度を高めることも報告されている(村上・西村,

2014)。藤原(2014)は、中学生に集団ソーシャル・スキルトレーニングを実施し、かかわりのスキルと承認感の向上を確認している。これらの研究からは、学級状態にソーシャルスキルが大きく影響していることが示唆される。

「学級生活で必要とされるソーシャルスキル(クラスルームソーシャルスキル: Classroom Social Skills)」

(以下、CSSと表記)は、子どもたちが学級でより満足感が高く生活できること、学級集団が子どもたちの親和的なかかわりの中で建設的にまとも機能すること、その両方を同時に満たすために、子どもたちに身につけさせたいソーシャルスキルを抽出することを目的に開発された(河村・品田・藤村, 2007)。「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU 小学校4～6年用」(以下、hyper-QUと表記)(河村, 2007)には、CSSが「ふだんの行動をふりかえるアンケート」として、16項目があげられている。その項目は、「配慮」のスキル8項目と「かかわり」のスキル8項目で構成されている。すなわち、よりよい学級生活に必要なスキルは「配慮」と「かかわり」の2因子とされ、この両方のスキルがバランスよく遂行されることが求められる。

CSSの具体的な取り組み方法は、発達段階ごとに、さらに学級生活に必要なスキル項目ごとに示されている。また、河村ら(2007)は、CSSの取り組み

* 葛巻町立葛巻小学校

** 早稲田大学教育・総合科学学術院

は、学級生活のすべての場面で有機的に行われていくことが有効であると指摘している。このことは、ある教科指導に特化してクラスルームソーシャルスキルトレーニング (Classroom Social Skills Training) (以下、CSST と表記) の効果を期待できることも同時に示唆していると考えられる。

本研究においては、CSS を取り入れる場面を小学校体育に設定し、その効果を検証するものである。なぜならば、体育の授業成立には、CSS が効果的な要件となると考えられるからである。小学校学習指導要領(文部科学省, 2008) の体育の目標は、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」である。それをうけて、各学年の目標・内容にも、きまりや対人関係にかかわることについて網羅されている。たとえば、第1学年及び第2学年の目標は、簡単なきまりを工夫することと、だれとでも仲よくすることに触れている。第3学年及び第4学年においては、協力、公正などの態度の育成に触れ、内容には、随所で「きまりを守り仲よく」ということが明記されている。第5学年及び第6学年においても、内容に「約束(ルール)を守り助け合って」と明記されている。一方、CSS は、学級集団の中で友達とかかわるルールをその内容としている。すなわち、対人関係を良好にしていくことが求められる体育の授業成立に、CSS は効果的に作用すると考えられる。

河村(2012)は、学級集団づくりにかかわって、理想の学級集団であることの必要条件として、「集団内に、規律、共有された行動様式があること(ルールの確立)」と「集団内に、児童生徒同士の良好な人間関係、役割交流だけではなく感情交流も含まれた内面的なかかわりを含む親和的な人間関係があること(リレーションの確立)」の2点をあげている。

一方、体育においては、活動の場、範囲、内容、方法が多岐にわたること、危険と隣り合わせの活動も多いことなどから、活動の準備から安全にかかわるきまりを徹底させることが求められる。また、ゲームを

はじめとして教材自体にルールが不可欠であることから、ルールの確立をめざす学級集団づくりとリンクするのである。

さらに、ゲームを通しての協力的な態度の育成や、温かい人間関係づくりには欠かせない身体的な接触、身体活動を通しての感情交流もできる。また、コミュニケーションの場を意識的に幅広く取り入れることができるなど、体育授業にはリレーションの確立のために不可欠な要素が数多く存在し、学級集団づくりに寄与するものとしておおいに期待できる。

以上のことから、体育は学級集団づくりに直接的にかかわる重要な教科であると考えられる。

体育の授業にCSSTを取り入れる際、留意することは、CSSTが、主な目的とならないようにすることである。CSSTは、各教科等の学習指導目標そのものではなく、学習活動を成立させるための基本的な要件の一つであると考えられるからである。これにより、他の教科においてもCSSTを取り入れる有効性を示唆できると考えた。さらに、CSSTによるスキルの遂行状態の変容とそれによる学級状態の変容を見取り、考察するものである。これにより教科指導と学級経営との関係について明らかにするものである。

【方法】

1 調査対象 A 県の公立 B 小学校の6年生児童(17人)を対象とした。

2 測定用具 学級生活に対する児童の認知の測定には河村・田上(1997)が作成し、標準化されている「学級生活満足度尺度(小学生4~6年用)」を使用した。この尺度は、児童の学級に対する満足度の度合いを調査する尺度であり、承認と被侵害の2つの下位尺度からなる。それぞれの尺度は4件法(とてもそう思う、少しそう思う、あまりそう思わない、まったく思わない)で、6つの質問項目でできている。承認得点は学級の中で級友からの受容や承認の有無に関連があり、被侵害得点は児童が級友から暴力や耐えられない悪ふざけを受けたり無視などをされたりするような侵害行為の有無と関連がある。また、学級の児童が学級生活

において遂行している CSS の状態の測定には、hyper-QU の「ふだんの行動をふりかえるアンケート」を使用した。この尺度は、河村 (2007) が学級生活に適應するためのスキルを抽出したもので、「配慮」のスキルと「かかわり」のスキルからなる。それぞれ 4 件法 (いつもしている、ときどきしている、あまりしていない、ほとんどしていない) で、8 つの質問項目でできている。

3 調査時期と手続き

本調査は 201X 年 1 月に調査を行った。児童の調査におけるテスターは本研究者が行った。その際、本テストが学校の成績に関係がないことを伝え、特に児童に余計な不安がかからないように配慮した。調査用紙は業者に送付し、コンピュータ処理を依頼した。

業者から分析結果が戻った時点で、本研究者と担任教師とで学級状態のアセスメントを行い、CSST を取り入れた体育授業の計画を立案した。研究の経過については、後の事項で述べる。

実践後、効果測定をするために、201X 年 2 月に事後の調査を行った。この際は、本研究者が 1 回目にした手順通りに担任教師が行った。

【実践の経過】

1 調査 1 回目の結果分析

1 月、3 学期のはじめに、実践前の実態把握のために hyper-QU を実施した。学級生活満足群は 41% と半数以下であったが、侵害行為認知群に位置する児童がいなかったこと、非承認群と学級生活不満足群に位置するすべての児童の承認得点が 15 点以上あり高めであること、また、学級生活不満足群に位置する 2 名の児童の被侵害得点がそれぞれ 14 点、12 点であり低めであることなどから、満足型に近い良好な学級状態であると判断した。コンピュータ診断でも、学級集団は親和的なまとまりのある学級集団に近いと判定された。また、ルールとリレーションの確立状況も良好で、学級方針もこのまま継続されることが望ましいことなどが指摘された。一方、この状態が徐々に緩んでいく過程の段階の学級も見られるので、注意が必要である

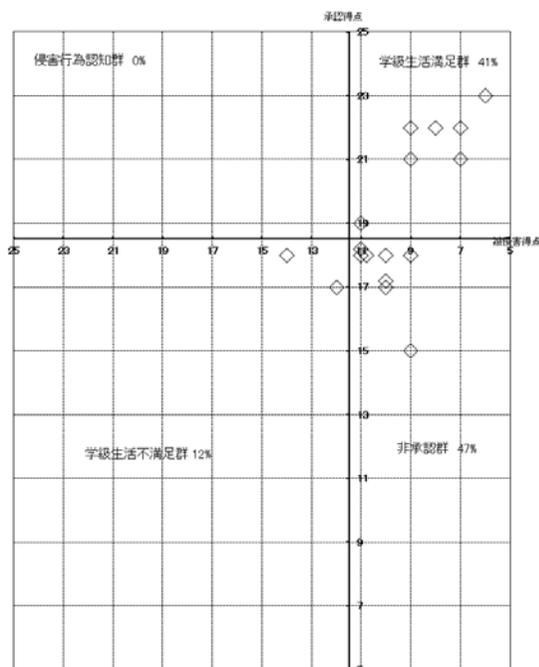


Figure 1 事前の学級生活満足度尺度の結果

ことも指摘された (Figure 1)。

また、CSS の状態は、「配慮」のスキルと「かかわり」のスキルともに全国の平均とほぼ同じ程度であった。しかし、担任教師の日常的な観察から、児童が主体的に友人に対して人間関係を築こうとする態度が不十分であるため、今後の課題として、友人に対する「配慮」のスキルや友人と積極的・能動的にかかわる「かかわり」のスキルを伸ばすことがあげられた。

hyper-QU による診断とともに、学級担任や関わっている教員と学級状態について検討した。この学級児童は、就学前からほぼ同じメンバーで過ごしているため、お互いを理解し合っており、言葉を交わすことをしなくても、なんとなく気持ちが通じ合っている状況が多くみられた。反対に、兄弟げんかのように、時として、歯に衣着せぬつつけんどんな言い方をする児童もみられた。年齢とともに、お互いを理解し合っても、ものの言い方によって、傷ついてしまう児童もあった。

2 各自のターゲットスキルの設定と具体的な取り組みの決定

hyper - QU の個票を児童に返し、自分の課題を見つけてさせた。さらに、体育の授業に特化して、一人一人に目標となる行動（ターゲットスキル）を決めさせ、計画的に取り組むこととした。その際、「配慮」のスキル8項目と、「かかわり」のスキル8項目から各1

つずつ、スキルを選ばせ、それぞれのスキルに対して具体的にどう取り組むのか、CSSTの取組に向けての参考資料（児童用）「配慮」のスキル用と「かかわり」のスキル用（Table 1, 2）を基に、計画を立案させた。スキル項目を絞り込むことにより、取組内容が焦点化されると考えたからである。CSST取組カードは「配慮」のスキル用と「かかわり」のスキル用の2枚を児

Table 1 CSST の取組に向けての参考資料（児童用）「配慮」のスキル用

あいての立場になって考えよう。もっともっとやさしくなれるよ！

がんばる行動	スキルアップのために
1 ともだちの気持ちを考えながら話をする。	相手の立場になって、「君の名は。」状態になる。
2 何か失敗したときに、「ごめんなさい」と言う。	言われたら「どういたしまして」「平気だよ」「だいじょうぶ！」などかえす。
3 ともだちが話しているときは、その話を最後まで聞く。	うなずきながら、話している方を見て聞く。 話す方も、これで終わりだと分かるように「以上です」「おわります」など言う。
4 みんなで決めたことにはしたがう。	決めたことは何だったかを忘れない。 決めたことを確かめてから活動する。
5 班活動でともだちが一生けんめいやって失敗したときは、ゆるす。	えがおで、ドンマイ！など、なにかセリフを考える。 「ドンマイ」「オーケーだよ」「問題ないよ」
6 ともだちが何かをうまくしたとき、「じょうずだね」とほめる。	セリフを考えよう。「ナイス！」「エクセレント」「さすが！」 ジェスチャーもつけよう。「拍手」「親指立てる」
7 ともだちとの約束は守る。	守れそうもないときは、そのことをつたえる。 約束したら、約束したことを3回となえて、わすれない。
8 何かをたのむときなど、相手にめいわくがかからないか考える。	たのむまえに、「こんなことをたのんだら、めいわくかどうか」、だれかに相談してからたのむ。ほんとうにたのまなければならないことか少し考える。

Table 2 CSST の取組に向けての参考資料（児童用）「かかわり」のスキル用

じぶんから勇気を出してせっきょくてきにかかわろう。あかるく、えがおでかかわろう！

がんばる行動	スキルアップのために
9 みんなと同じくらい、話をする。	はじめにけつろんを言ってから、理由を言うようにする。 まよっていたり考えがまとまっていなかったりしたときには、〇さんの考えもわかるし〇くんの意見もいいと思う。「ちょっとまよっています」と、ともだちの意見についての考えをすなおに言う。
10 みんなのためになることは、自分で見つけて実行する。	一日、何かひとつ勇気を出してやってみよう。 こっそりできることでもいい。
11 ともだちが楽しんでいるときに、もっと楽しくなるようにもりあげる。	もりあげる、しぐさやセリフを考えよう。 「拍手をする」「笑ってみる」「いいねえ」
12 うれしいときは、えがおやガッツポーズなどのみぶりで気持ちをあらわす。	いろんなガッツポーズがある。 その場にあったみぶりを考えよう。
13 ほかの人に左右されないで、自分の考えで行動する。	「〇さんの考えも分かるけど、」ともだちの意見も大事にして、自分の考えを言えばだいじょうぶ。勇気をもって、行動しよう。
14 自分からともだちをあそびにさそう。	さそうセリフを考えよう。「よかったら、いく?」「いっしょにいこうぜ」 ことわられたら「また今度」と言おう。一回であきらめない。 ことわられたからといっていやがられているわけではない。
15 係のしごとをするとき、何をどうやったらよいか、意見を言う。	自分が係の仕事で、うまくいったこと、こまったことを思い出してみよう。
16 ともだちの中心になって、何をしておそぶか、アイデアを出す。	これまで、たのしかったことを思い出してみよう。 手をあげてから言ったり、「こんなのはどう?」と言ってから考えを言ったりしよう。

よりよい がっせいをめざして！

あいての立場になって考えよう。もっともっとなやましくおぼれるよ！

年 名まえ _____

1. 1～8のどの行動を目標にしますか。
2. 目標達成のために、どう取り組みますか。
3. 自分の取り組みをふりかえろう

1. 目標となる行動

2. どう取り組みますか。

3. ふりかえり

日にち	よかったこと、できたこと、きをつけたことなど

これまでのとりくみをふりかえってのかんそう

よりよい がっせいをめざして！

せっきょくてきにかかわろう。あかるく、えがおで！

年 名まえ _____

1. 9～16のどの行動を目標にしますか。
2. 目標達成のために、どう取り組みますか。
3. 自分の取り組みをふりかえろう

1. 目標となる行動

2. どう取り組みますか。

3. ふりかえり

日にち	よかったこと、できたこと、きをつけたことなど

これまでのとりくみをふりかえってのかんそう

Figure 2 CSST 取組カード「配慮」のスキル用

Figure 3 CSST 取組カード「かかわり」のスキル用

童に配布した (Figure 2, 3)。

3 体育授業実践

以下、体育の授業を行った。

期間 2月10日～2月29日

活動名 ソフトバレーボール

ねらい ネット型ゲームのルールを理解し、仲間と楽しみ合いながら楽しく運動することができる。

指導者の役割 児童は、実際はスキルを遂行しているのに、不十分であると感じたり、反対に、スキルを上手に遂行していないのに、過大評価をしたりしていることがある。つまり、自分のスキル状態を的確に客観視できないのである。また、スキルの遂行の仕方に対する認知の仕方には、個人差がある。そこで、教師は、好ましいスキルが遂行されたときに、その場で評価して、「配慮する」「かかわる」とはどのような行動なのかを意識させるようにした。

活動の流れと意識させたいスキル項目

(1) 活動の準備

準備や片付けでは個別の役割を固定せず、自分から進んで仕事を見つけて動く場を意図的に設定した。

「かかわり」のスキルの「みんなのためになることを見つけて実行している」を意識して評価した。

(2) ウォーミングアップ

体を動かしながら仲間づくり、チームづくりを行った。教師が4人組、男女交じって5人組などの指示を出し、その条件に合ったグループをつくった。グループで手をつなぎながらジョギング、スキップ、などの活動をさせた。

「かかわり」のスキルの「自分から友達を遊びにさそっている」を意識して評価した。

(3) チームごとにサークルを作ってボールつなぎ

トス練習として、円陣でランダムにパスをし合わせた。

「配慮」のスキルの「友達が失敗したとき許している」「友達が何かうまくしたときほめている」「友達との約束は守っている」を意識して評価した。

「かかわり」のスキルの「友達が楽しんでいるとき

に盛り上げている」「うれしいときは身振りで気持ちを表している」「ほかの人に左右されず自分の考えで行動している」を意識して評価した。

(4) 1回目のゲーム

10点先取のチーム対抗のゲームを行わせることにより、成果や課題を見つけ出させた。

「配慮」のスキルの「友達が失敗したとき許している」「友達が何かうまくしたときほめている」「友達との約束は守っている」を意識して評価した。

「かかわり」のスキルの「友達が楽しんでいるときに盛り上げている」「うれしいときは身振りで気持ちを表している」「他の人に左右されず自分の考えで行動する」を意識して評価した。

(5) チームごとの話し合い

1回目のゲームでの課題と2回目に向けての作戦会議を行った。

「配慮」のスキルの「友達の気持ちを考えながら話をする」「友達が話をしているときは、最後まで聞く」を意識して評価した。

「かかわり」のスキルの「みんなと同じくらい話している」を意識して評価した。

(6) 2回目のゲーム (話し合いを生かしたゲーム)

1回目のゲームと同様に「配慮」, 「かかわり」のスキルとも意識して評価した。

(7) 振り返り

各自がワークシートに振り返りを記入した。教師は、自分のスキルを客観的に評価している児童を意図的に指名するとともに、活動の中で、好ましいスキルを具体的に紹介した。

以上が、本単元の典型的な展開である。CSSを意識した授業は計5回行われ、最終回到全活動を振り返らせた。

【結果と考察】

1 振り返っての児童の感想

CSST を取り入れた体育の授業を実施したことにより、日常的に遂行していたスキルが、相手に対する配慮であったり、積極的なかわりであったりしたことに気づいた児童が見られた。すなわち、自らの対人関係づくりを、肯定的に受け止めることができたという感想が散見できた。

指導者である担任教師によれば、児童が遂行しているスキルの表面的な様子は実践前と明確な変容は見られないが、児童の認知が変容した部分が多い。たとえば、「笑顔で気持ちを表す」という目標を設定した児童は、笑顔を意識して喜びを表したと振り返っているが、そのこと自体は、急激な変容ではないが、笑顔を意識できたことと、それがとても心地よいことだったということが大きな変容であると推察された（認知の変容に関する感想）。

また、CSS を日常生活に生かしていく意欲的な感想も多くみられた。ゲームなどの身体活動や用具準備をはじめとするグループワークを通して、共同体験をし、感情交流が促進されたことが意欲化につながったと考えられる（他の学校生活への意欲化がみられる感想）。

さらに、ソーシャルスキルトレーニングの展開において重要な場面であるモデリングを児童同士で行うことにより、スキルの表現の多様性について具体的に理解することができたと考える。たとえば、「かかわり」のスキルのうちの「身振りで表す」スキルにしても、身振りの度合いを理解できず、スキルを遂行できない児童がはじめは見られたが、教師が、身振りの度合いや表現の仕方が多様であり、それを児童相互に認め合うことを伝えたことで、自分のしやすい表現を選択してスキルを遂行することができたと考えられる（スキルの遂行についての認識の変容）。

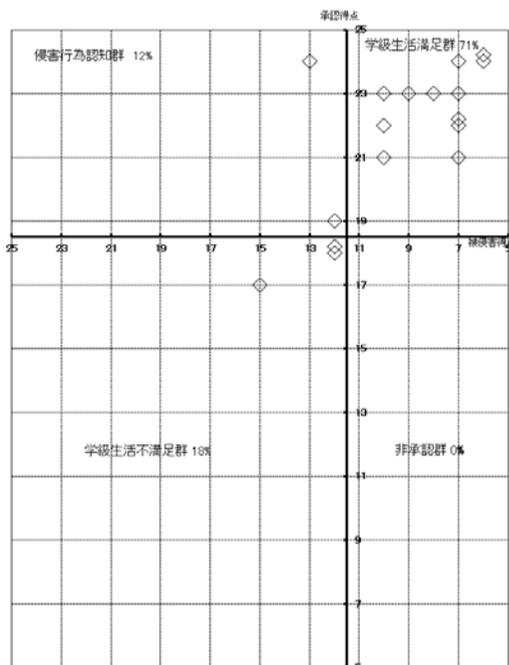


Figure 4 事後の学級生活満足度尺度の結果

2 事後の状態

授業実践後、2回目のhyper-QUを実施した。「配慮」のスキルは学級平均が1回目26.6であり、2回目28.7と向上した。「かかわり」のスキルは、1回目23.7、2回目27.0と向上した（Table 3）。

学級生活満足度尺度については、1回目学級生活満足群41%に対し、2回目は、71%と大幅に向上した（Figure 4）。コンピュータによる判定も「親和的なまとまりのある学級集団」であり、ルールの定着状況や人間関係も良好であると判断された。

Table 3 児童が学級で必要とされるソーシャルスキル尺度の全国平均と事前・事後の学級平均の数値

	全国平均	事前の学級平均	事後の学級平均
配慮のスキル	27.4	26.6	28.7
かかわりのスキル	24.1	23.7	27.0

【全体考察】

本実践は、体育の授業に特化してCSSTに取り組んだものである。1カ月足らずの期間で「配慮」「かわり」のスキルの状態が向上し、さらに学級生活満足度についていえば、学級生活満足群の大幅な増加によって、短期間でのCSSTの有効性が示唆された。その要因として以下のことが推察される。

1 体育授業における効果的なCSST

体育の授業においては、その特性上、身体活動や共同体験、また、それらを通しての感情交流が促進される。CSSTは、どの教育場面でも可能であるが、集団での行動や、それに伴う感情交流が多くの場面で行われる体育の授業において、効果的に促進されたことが推察された。

2 基盤となる良好な学級状態

3学期のはじめ、事前の学級状態は、満足群の児童が41%であった。これは、河村(2000)が指摘する満足型の学級状態までには至らないが、学級生活不満足群の児童2名が、学級生活不満足群の中でも承認得点が高く、被侵害得点が低い位置にあったことなど、学級生活に対して全体的に満足している状態であったと考えられる。学級担任は、休み時間に学級の児童と毎日遊び、掃除も共に行うなど、児童に寄り添う場面が多くみられた。児童も担任を慕い、放課後も担任と雑談に興じたり、学級行事の準備をしたりするなど、児童同士、担任教師と児童との関係が親密であり、児童にとっては教師の指導を受け入れやすい状態にあったといえる。そのため、指導の経過がスムーズであり、指導のねらいにそって体育授業が進められたと考えられる。

3 共通の目的意識

対象となる学級において、3学期のはじめに、卒業式に向けて、どんな卒業式を迎えたいか、どんな姿になって卒業したいのかなど、お互いの夢や希望を語り合う場面を設定した。これにより、よりよい学級集団をつくって最後のよい小学校生活を全うしたいという共通の認識が生まれ、前進的なトーンで学習が進められたと考えられる。

4 児童一人一人の課題意識

本研究対象となった児童は、hyper-QUにおけるコンピュータ処理された客観的なデータを見ることによって、冷静に自分のCSSの状態を理解することができ、そのことによって課題意識をもつことができたと考えられる。

5 スキル遂行に対する認識の変容

CSSTの取り組みで、担任教師が留意したのは、児童がすでに日常的に遂行しているスキルについて意識することであり、新たに取り組むスキルではないこと、また、自分のスキルのスタイルを無理に変える必要はないことを理解させることであった。このことにより、自分の行動をポジティブに受け止めることができ、自己肯定感が高まったと考えられる。

【課題】

本実践における課題としては承認得点の向上は見られなかったものの、少人数ではあるが、侵害行為を感じている児童が見られることである。取り組みの中で、「ドンマイ」「がんばれ」などの声がけを「かわり」のスキルの一つとして行ったが、たとえば「私は他の友達よりあまり声をかけられなかったような気がする」「ミスしたのにドンマイと言われなかった」というような思いをもち、それが侵害行為認知に影響したと考えられる児童が見られた。この事例に関しては、担任が個別に面談をし、悪気があったことではないことを理解させたが、CSSTの際には児童一人一人の受け止め方にも差異があることを理解したうえで、細かい配慮をしながら実施していく必要がある。

【おわりに】

「主体的・対話的で深い学び」(文部科学省, 2017)の実現には、対人関係のスキルが必要とされるはずである。今回の実践で、スキルの向上が及ぼすプラスの効果を確認できた。本研究では、体育の授業に特化したものだったが、他の教科や領域においてもCSSTを取り入れた学習方法を研究する必要がある。

【引用文献】

- 藤原和政 (2014). 中学生に対する学級単位の集団ソーシャル・スキルトレーニングの効果に関する研究—学級環境に着目した検討— 学級経営心理学研究, **3**,75-85.
- 河村茂雄 (2000). 学級経営コンサルテーション・ガイド 図書文化社
- 河村茂雄 (2007). よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper - QU 小学校4～6年用 図書文化社
- 河村茂雄 (2012). 学級集団づくりのゼロ段階 学級経営力を高める Q-U式学級集団づくり入門 図書文化社
- 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫 (2007). いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 図書文化社
- 河村茂雄・田上不二夫 (1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, **30**, 112-120.
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 体育編
- 文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領
- 村上達也・西村多久磨 (2014). 小学生の担任教師への信頼感, ソーシャル・スキル, 学級生活満足度の関連 学級経営心理学研究, **3**,1-10.
- 武蔵由佳・河村茂雄 (2015). 小学校における学級集団の状態像と児童の学級生活意欲およびソーシャルスキルとの関連 学級経営心理学研究, **4**, 29-37.
- 武蔵由佳・河村茂雄・藤村一夫・苅間澤勇人 (2012). 児童が学級生活で活用しているソーシャルスキルと心理的ストレスとの関連 学級経営心理学研究, **1**,44-50.
- 曾山和彦 (2012). 小学校における継続的なソーシャル・スキル・トレーニング実践とその効果 教育カウンセリング研究, **4**,37-45.
- (2017年5月8日受稿, 2017年8月6日受理)

How Classroom Social Skills Training (CSST) in Physical Education Affects Classroom State in Elementary School

Kazuo Fujimura (Kuzumaki Elementary School)

Shigeo Kawamura (Waseda University)

The objective of this study is to examine the association between the implementation of Classroom Social Skills Training in physical education in elementary school and its effect and benefits on the classroom state. The study was conducted for a sample of sixth graders at B public elementary school in A prefecture. As a result not only consideration and involvement of skills were improved, but also the improvement of the classroom state was observed. As a conclusion the implementation of Classroom Social Skills Training may have a positive effect on the classroom management.

Keywords: Classroom Social Skills Training (CSST), physical education, classroom state